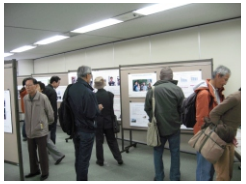
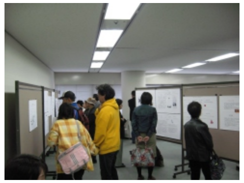
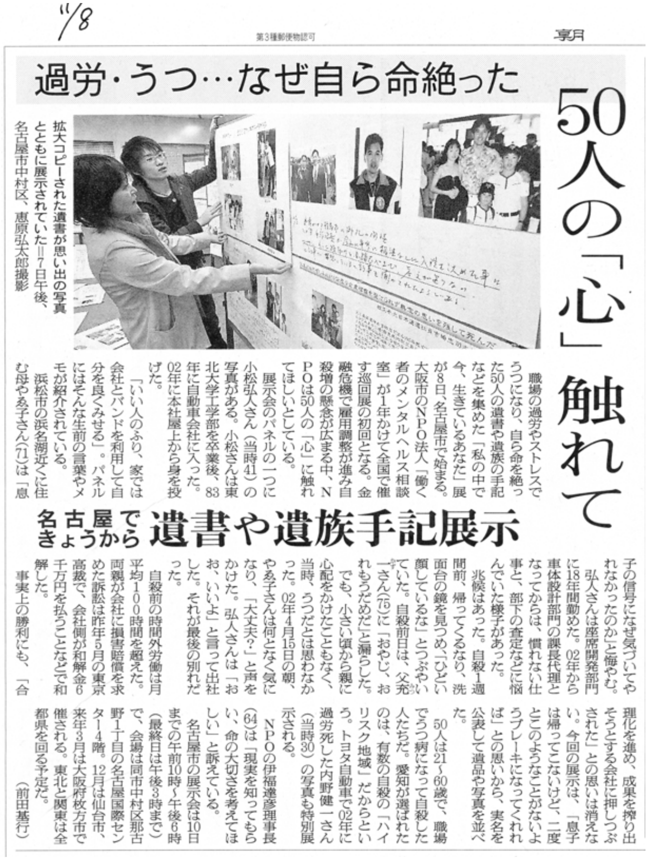
第8回パネル展　名古屋
2008年11月





朝日新聞2008年11月８日



11/8

第3種郵便物認可

過労・うつ…なぜ自ら命絶った

50人の「心」触れて

名古屋できょうから　遺書や遺族手記展示

拡大コピーされた遺書が思い出の写真とともに展示されていた＝7日午後、名古屋市中村区、恵原弘太郎撮影

職場の過労やストレスでうつになり、自ら命を絶った50人の遺書や遺族の手記などを集めた「私の中で今、生きているあなた」展が8日、名古屋市で始まる。大阪市のNPO法人「働く者のメンタルヘルス相談室」が1年かけて全国で催す巡回展の初回となる。金融危機で雇用調整が進み自殺増の懸念が広まる中、NPOは50人の「心」に触れてほしいとしている。

展示会のパネルの一つに小松弘人さん（当時41）の写真がある。小松さんは東北大学工学部を卒業後、83年に自動車会社に入った。02年に本社屋上から身を投げた。

「いい人のふり、家では会社とバンドを利用して自分を良くみせる」。パネルにはそんな生前の言葉やメモが紹介されている。

浜松市の浜名湖近くに住む母やゑ子さん(71)は「息子の信号になぜ気づいてやれなかったのか」と悔やむ。

弘人さんは座席開発部門に18年間勤めた。02年から車体設計部門の課長代理となってからは、慣れない仕事と、部下の査定などに悩んでいた様子があった。

兆候はあった。自殺1週間前、帰ってくるなり、洗面台の鏡を見つめ、「ひどい顔しているな」とつぶやいていた。自殺前日は、父充一さん(75)に「おやじ、おれもうだめだ」と漏らした。

でも、小さい頃から親に心配をかけたこともなく、当時、うつだとは思わなかった。02年4月15日の朝、やゑ子さんは何となく気になり、「大丈夫？」と声をかけた。弘人さんは「おお、いいよ」と言って出社した。それが最後の別れだった。

自殺前の時間外労働は月平均100時間を超えた。両親が会社に損害賠償を求めた訴訟は昨年5月の東京高裁で、会社側が和解金6千万円を払うことなどで和解した。

事実上の勝利にも、「合理化を進め、成果を搾り出そうとする会社に押しつぶされた」との思いは消えない。今回の展示は、「息子は帰ってこないけど、二度とこのようなことがないようブレーキになってくれれば」との思いから、実名を公表して遺品や写真を並べた。

50人は21～60歳で、職場でうつ病になって自殺した人たちだ。愛知が選ばれたのは、有数の自殺の「ハイリスク地域」だからという。トヨタ自動車で02年に過労死した内野健一さん（当時30）の写真も特別展示される。

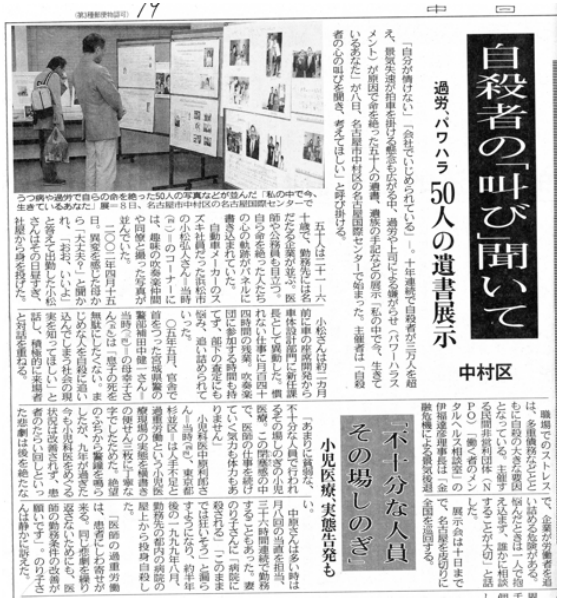
NPOの伊福達彦理事長(64)は「現実を知ってもらい、命の大切さを考えてほしい」と訴えている。

名古屋市の展示会は10日までの午前10時～午後6時（最終日は午後3時まで）で、会場は同市中村区那古野1丁目の名古屋国際センター4階。12月は仙台市、来年3月は大阪府枚方市で催される。東北と関東は全都県を回る予定だ。

（前田基行）

第8回パネル展　名古屋

中日新聞2008年11月９日



（第3種郵便物認可）　1/9

自殺者の「叫び」聞いて

過労、パワハラ　50人の遺書展示

中村区

「自分が情けない」「会社でいじめられている」――。十年連続で自殺者が三万人を超え、景気失速が拍車を掛ける懸念も広がる中、過労や上司による嫌がらせ（パワーハラスメント）が原因で命を絶った五十人の遺書、遺族の手記などの展示「私の中で今、生きているあなた」が八日、名古屋市中村区の名古屋国際センターで始まった。主催者は「自殺者の心の叫びを聞き、考えてほしい」と呼び掛ける。

うつ病や過労で自らの命を絶った50人の写真などが並んだ「私の中で今、生きているあなた」展＝8日、名古屋市中村区の名古屋国際センターで

五十人は二十一―六十歳で、勤務先には名だたる企業が並ぶ。医師や公務員も目立つ。自ら命を絶った人たちの心の軌跡がパネルに書き込まれていた。

自動車メーカーのスズキ社員だった浜松市の小松弘人さん＝当時(四一)＝のコーナーには、趣味の吹奏楽仲間や同僚と撮った写真が並んでいた。

二〇〇二年四月十五日。異変を感じた母から「大丈夫？」と聞かれ、「おお、いいよ」と答えて出勤した小松さんはその日昼すぎ、社屋から身を投げた。

小松さんは約二カ月前に車の座席開発から車体設計部門に新任課長として異動した。慣れない仕事に月百四十四時間の残業。吹奏楽団に参加する時間も持てず、部下の査定にも悩み、追い詰められていった。

〇五年五月、官舎で首をつった宮城県警警部補田中健一さん＝当時(三四)＝の母幸子さん(五九)は「息子の死を無駄にしたくない。まじめな人を自殺に追い込んでしまう社会の現実を知ってほしい」と話し、積極的に来場者と対話を重ねる。

職場でのストレスは、多重債務などとともに自殺の大きな要因となっている。主催する民間非営利団体（NPO）「働く者のメンタルヘルス相談室」の伊福達彦理事長は「金融危機による景気後退で、企業が労働者を追い詰める危険がある。悩んだときは一人で抱え込まず、誰かに相談することが大切」と話した。

展示会は十日までで、名古屋を皮切りに全国を巡回する。

「不十分な人員その場しのぎ」

小児医療、実態告発も

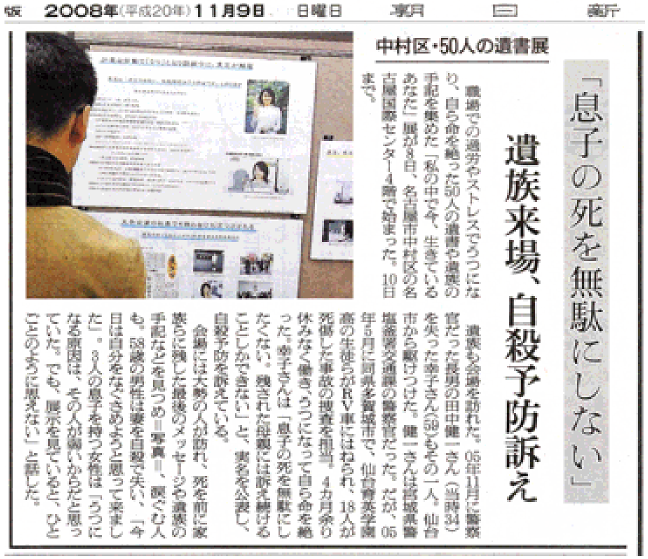
「あまりに貧弱な、不十分な人員で行われるその場しのぎの小児医療。この閉塞感の中で、医師の仕事を続けていく気力も体力もありません」

小児科医中原利郎さん＝当時(四四)、東京都杉並区＝は人手不足と過重労働という小児医療現場の実態を横書きの便せん三枚に丁寧な字でしたためた。絶望のふちから警鐘を鳴らしたが、九年が過ぎた今も小児科医をめぐる状況は改善されず、患者のたらい回しといった悲劇は後を絶たない。

中原さんは多い時は月八回の当直を担当、三十六時間連続で勤務することもあった。妻のり子さんに「病院に殺される」「このままでは狂いそう」と漏らすようになり、約半年後の一九九九年八月、勤務先の都内の病院の屋上から投身自殺した。

「医師の過重労働は、患者にしわ寄せが来る。同じ悲劇を繰り返さないためにも、医師の勤務条件の改善が願いです」。のり子さんは静かに訴えた。

朝日新聞2008年11月９日



中村区・50人の遺書展

「息子の死を無駄にしない」

遺族来場、自殺予防訴え

職場での過労やストレスでうつになり、自ら命を絶った50人の遺書や遺族の手記を集めた「私の中で今、生きているあなた」展が8日、名古屋市中村区の名古屋国際センター4階で始まった。10日まで。

遺族も会場を訪れた。05年11月に警察官だった長男の田中健一さん（当時34）を失った幸子さん(59)もその一人。仙台市から駆けつけた。健一さんは宮城県警塩釜署交通課の警察官だった。だが、05年5月に同県多賀城市で、仙台育英学園高の生徒らがRV車にはねられ、18人が死傷した事故の捜査を担当。4カ月余り休みなく働き、うつになって自ら命を絶った。幸子さんは「息子の死を無駄にしたくない。残された母親には訴え続けることしかできない」と、実名を公表し、自殺予防を訴えている。

会場には大勢の人が訪れ、死を前に家族らに残した最後のメッセージや遺族の手記などを見つめ＝写真＝、涙ぐむ人も。58歳の男性は妻を自殺で失い、「今日は自分をなぐさめようと思って来ました」。3人の息子を持つ女性は「うつになる原因は、その人が弱いからだと思っていた。でも、展示を見ていると、ひとごとのように思えない」と話した。